

令和7年度 公益財団法人スポーツ安全協会スポーツ活動等普及奨励助成事業

国立曾爾青少年自然の家 教育事業 森の子パークで遊ぼう、学ぼう（10月）

- 【主催】国立曾爾青少年自然の家
【助成】公益財団法人 スポーツ安全協会
【期日】令和7年10月4日、5日（両日日帰り）
【場所】国立曾爾青少年自然の家 キャンプ場
【対象者】幼児・小学生を含む家族
【参加/募集】145名／489名
【講師】山本 剛氏（名張グリーンキーパーズ）
辻本 裕和氏（自然体験活動指導者）、向田 恵子氏（三重県森林協会）
島田 和秀氏・森 大樹氏（大阪千代田短期大学）
【担当】菱川裕輝・増田学（企画指導専門職）石地啓介・千葉博仁（事業推進係）



1 趣旨・目的

- 森の中で子どもたちが元気に遊び、遊びを通じて森林環境について学びを深める。
- 「森を大切にする人」、「森の中で遊び、親しむ機会」を増やす。

2 プログラム展開

	9:45～	10:00～	12:45～	14:00～	14:45
両日 共通	集合 はじめの会 遊びの約束 会場案内	<u>森で遊ぼう</u> ①スラックライン、モルック ②葉っぱ遊び、森の観察 ③薪割り、焚き火体験 ④丸太切り、クラフト	<u>森を学ぼう</u> チェーンソー での伐倒実演	<u>森を整えよう</u> ①ペグを使って点穴 (てんあな)を作ろう ②溝を掘って、暗渠 (あんきょ)を作ろう	おわり の会 解散

3 活動の様子

【遊ぶ】森と出会い、体を動かす

あいにくの雨天となったため、体育館とキャンプ場の2会場に分かれての実施となった。体育館では、室内でも体を動かして楽しめるスラックラインやモルックなどの体験を行い、子どもたちは歓声を上げながら挑戦していた。

森の中では、雨の森ならではの体験を実施。講師の島田・森氏の指導の下、参加者は様々な形や色の葉っぱを集め、葉っぱを使った遊びを通じて森と出会う体験をした。雨に濡れた葉の感触や香りを楽しみながら、子どもたちは自然との触れ合いを深めていた。

【使う】森の恵みを活用する

薪割り・火起こし体験では、参加者が自ら割った薪を使って火起こしに挑戦した。最初は苦戦する姿も見られたが、徐々にコツをつかみ、上手に火を維持できるようになった。その火を使ってマシュマロをあぶり、焼きたてを頬張る子どもたちの笑顔が印象的だった。

丸太切り体験では、のこぎりを使ってヒノキの丸太を輪切りにした。切った輪切りのヒノキを台座にして、どんぐりや松ぼっくりなど森で集めた自然物を使ったクラフト体験を行い、世界に一つだけのオリジナル作品を作り上げた。

【学ぶ】木を知り、森を知る

プログラムのハイライトとして、木こりである山本氏が参加者の前で杉の木の伐倒実演を行った。チェーンソーの音が響き渡る中、大きな杉の木がゆっくりと倒れていく様子に、子どもたちは息をのんで見守っていた。

伐倒後、山本氏から「なぜ間伐が必要なのか」について説明があり、参加者全員で切った後の空

を見上げた。木が倒れたことで開けた空間から差し込む光を感じ、森の循環や手入れの大切さを体感することができた。

【ととのえる】森に感謝し、環境を再生する

遊んだ後には、森に感謝の気持ちを込めて環境再生活動を行った。職員の指導の下、空気や水の流れを整えるための「点穴(てんあな)」や「暗渠(あんきょ)」を作る作業に取り組んだ。

焚き火体験で出た炭を活用し、穴や溝に撒いて森に還元した。炭に土壌改良（微生物の繁殖への助け）の効果があることを学び、参加者は『森で遊ぶこと』自体が、森の循環の一部を担っていることを実感していた。

小さなお子様も、枝を運んだり、小さなスコップで穴を掘ったりと、それぞれができる形で活動に参加していた。家族で協力しながら森を整える姿は、まさに「森を大切にする人」を育む場となっていた。



（上段左から丸太切り体験、クラフト、森の観察、下段左から薪割り、焚火、暗渠づくり）

4 ふりかえり

【参加者の声】

○自分だけではさせてあげられない様なことも体験することができました。今度はいつキャンプ行くの？とキャンプに行く会話が当たり前になりました。

○木を切るのがすごいと思ったなど子供の初めてやすごい！の気持ちが芽生えたイベントでした。子供のできるに合わせた活動を用意していただいたことも安心して参加させられました。

○3歳の娘は「葉っぱっぱじゃんけん」が1番楽しかったそうです。また木が倒れる場面で「バーンってなったなー！」とはしゃいでいました。

○森の中にあったもの、実や木の赤ちゃん、雨上がりの土の状態など実際に現地で体験しないとわからない事に少し興味をもった様子でした。伐倒を見たのが一番印象に残ってる様です。やってみたいと思ってるみたいですが、切る角度の難しさや危険を伴う事を勉強し、大きくなってからと話しました。

【担当者所見】

「普段できない体験！」「また行きたい」という多くの声に、目指していた「森への親しみ」が育まれたと実感しています。特に伐倒の迫力や小さな発見は、五感を使うリアルの体験ならでは。楽しさと厳しさの両面を知るこの時間が、将来「森を大切にする心」の原体験になると信じています。今後も、芽生えた興味をさらに広げる活動を続けていきたい。